

人間関係能力の育成のために必要な教師の支援の在り方について

コラージュ療法を体験プログラムに活用して

大和町立春日北小学校 教諭 深草 光明

要 旨

本研究は、人間関係能力の育成のための基盤となる自己存在感と、他者への共感的態度を児童が身に付けるために有効な体験プログラムを探ることを目標として行った。そのプログラムとして、臨床場面で用いられるコラージュ療法を活用することにした。コラージュを制作することを通して、児童は自己の内面を十分に表出することができ、開放感や満足感を味わうことができた。また、共同で作品を制作することや、制作後にシェアリングをすることなどにより、他者の考えに寄り添うことや自分との違いを認めることができるようになった。このことは、児童の自己存在感の高まり、他者への共感的態度の育成につながったと考える。

<キーワード> 人間関係能力 自己存在感 他者への共感的態度 コラージュ療法

1 主題設定の理由

学校現場において、子どもたち同士のかかわり合いのまずさから、様々な問題が発生している。周囲の子どもたちとうまくかかわっていけないために、日常的に友達とトラブルを繰り返す子どもや、友達の中ではうまく自分を表現できずに孤立し、集団行動が取れなくなる子どもなどが増えてきている。これらの原因は、子どもたち自身の人間関係能力の未熟さによるものが大きいと考えられる。諸富祥彦はこの人間関係能力について、「人間関係能力=人間関係の耐性+スキル(技能)」⁽¹⁾と定義している。言い換えれば、友達関係の中で多少いやなことがあっても耐える力と、どうすれば互いが納得して解決できるかを考え実行に移す力である。

その人間関係能力の基盤となるものは、自己存在感と他者への共感ではないかと考えた。集団内において存在感をもっている子どもは、多少のトラブルでも我慢ができるであろうし、相手に対して共感的な態度で接することができる子どもは、トラブルの際にも互いが納得する解決法を探ることができるからである。

本研究では、この自己存在感と、他者への共感的な態度を育てる体験プログラムとして、コラージュ療法を用いることにした。個人によるコラージュの体験では、自己の内面を十分に表出させることによる満足感・達成感を味わわせることができる。さらに、その後、他者とのイメージの触れ合いの場面として用いるグループによるコラージュでは、互いのイメージのせめぎあいがあるが、充実感をもって完成を迎えることができる。

これらのコラージュの活動は子どもたちの自己存在感、他者への共感的な態度の育成のために効果があり、人間関係能力の改善につながると考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

子どもたちの人間関係能力の基盤になる自己存在感や共感的態度を育てるために有効な体験プログラムの在り方を実践を通して探る。

3 研究の仮説

自分の内面を思うように表出し、満足感・達成感を得る体験を通して、他者とかかわる次のような手立てを取れば、自己存在感を獲得するとともに、他者と共感的にかかわりをもつことができるようになるであろう。

コラージュを個人やグループで行い、イメージを表出したり、イメージを共有したりする。

シェアリングを通して、他者とのかかわりを振り返る。

4 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

- ア 文献等による理論研究
- イ 仮説検証のための授業実践（対象第5学年）及びその分析と考察
- ウ 人間関係能力の育成に効果的な体験プログラムの内容や実施方法についてのまとめ

(2) 研究の方法

- ア 各種の研究紀要，実践記録などを基に体験プログラムの理論研究を行う。
- イ コラージュ体験前後における児童の心情の変化及び学級としての実態の変化を分析する。
- ウ 成果をまとめ，学級で行うコラージュの活動案を作成する。

5 研究の実際1(実践化への手立て)

(1) 研究の全体構想

子どもたちの人間関係能力を育てるには、その基盤となっていると思われる「自己存在感」と「他者への共感的態度」を育てる必要があると考えた。例えるならば、それは「花」と「花壇の土」の関係に似ているように思う。人間関係能力という「花」を咲かせるにはまず土作り（自己存在感，他者への共感的態度の育成）をする必要がある。植物の種が発芽しやすくなるための環境を整える作業と同じである。それが土作りであり、ここでいう人間関係能力の基盤と考える「自己存在感」と「他者への共感的態度」を育てるということである。そして、今回、花壇の土作りの道具として考えたのが「コラージュ」である。コラージュという手立てを教育現場に取り入れ、子どもたち一人一人に自己存在感を高める体験をさせ、他者と共感的にかかわる体験をさせることにより、人間関係能力の基盤が培われ、「人間関係能力」という花が咲くと考えた。

ここで用いるコラージュ療法とは、1987年頃より始められた比較的新しい心理療法である。写真や絵を雑誌などから切り取り、画面上に貼って作品とする。他の芸術療法と同じように、制作すること自体に自己治癒的要因が大きいと言われている。既存の絵や写真を使って作品を作るので上手、下手に関係なく自己表現や、美意識の満足感をたやすく得ることができ、そのことが治療的要因の柱となっている。

本来このコラージュ療法は、心理療法として行われるものであるが、自己表現のしやすさ、満足感の得やすさという特徴は、学級全体を対象にして予防・開発的なプログラムとしても効果的であると考えられる。

また、人間関係作りの体験過程について杉浦京子著「臨床心理学講義」を参考にして、図1のように考えることにした。この中でも今回は特に第2～第3段階を重視したいと考えた。一人一人の自己存在感を高めた上で他者と共感的にかかわる。この2つをフィードバックさせることにより、自他に対する共感がより深まり、自分の良さ、他者の良さを両方認めることができるようになると思ったからである。

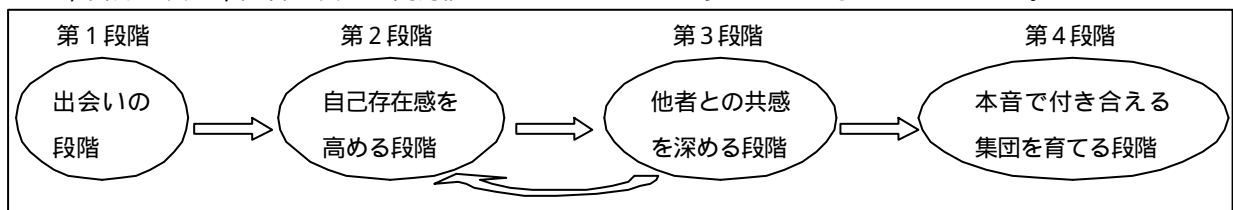


図1 人間関係作りの体験過程

(2) 検証授業計画

コラージュによる検証授業を5時間設定した(次頁表1)。「たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U」⁽²⁾を用いてクラスの実態を把握した上で検証授業を行い、事後に同調査により、その変容を見ることにした。また、毎時間、コラージュの前後にアンケートを取り、その結果を基に児童の心情の変化を分析した。アンケートはSD法による10項目の評価と、記述式によるものからなる。SD法では、子どもたちの心情を形容詞の対概念で示したものを5件法により点数化し、コラージュの前後で平均得点の変容を見る。例えば「明るい 暗い」の項目では、とても明るい(5点)、やや明るい(4点)、どちらでもない(3点)、やや暗い

(2点),とても暗い(1点)とした。記述式のアンケートはコラージュを終えた後の達成感や満足感を聞くもので,シェアリング場面においても活用するようにした。また,コラージュの作品そのものについても分析の対象とした。

表1 本研究の授業計画

授業の検証は,「コラージュ前後の児童の心情の変化」「集団内のコミュニケーションの深まり」「自己理解や他者理解の深まり」の3つの視点で行うことにした。

時数	主な学習内容
第1時	個人によるコラージュ制作及び全体でのシェアリング
第2時	4人グループによるコラージュ制作及びグループでのシェアリング
第3時	個人によるコラージュ制作及びグループ内のシェアリング
第4時	4人グループによるコラージュ制作及びグループでのシェアリング
第5時	クラス全員によるコラージュ制作と全体でのシェアリング

6 研究の実際2(第5学年における授業を通しての検証)

(1) 検証授業1(1/5)

ア 本時の展開

学習活動	教師の働き掛け	検証
1 コラージュのやり方を知る	<ul style="list-style-type: none"> 雑誌の切抜きを自由に台紙に貼っていくこと,友達と話さないことを伝える。 	
2 コラージュを制作する		
3 出来上がった作品に題名を付ける		
4 友達の作品と交換し,作品の感想を書く	<ul style="list-style-type: none"> 自分の心のままに作品を作ってよいこと,優れた作品,理想的な作品というもの存在しないということを先に説明しておく。 	検証
5 アンケートに記入する	<ul style="list-style-type: none"> 作品の良いところに目を向け,批判的なことは書かないように声掛けをする。 	
6 本時のまとめをする	<ul style="list-style-type: none"> 制作中やシェアリング場面のことなどを自由に書かせる。 自己理解と他者への共感について話しをする。 	検証

イ 第1時(個人で制作するコラージュ)における考察

今回初めてコラージュを行うこともあり,子どもたちはとても興味をもって授業に臨んだように思う。雑誌を切り抜いているとき,糊で貼り付けているとき,いずれも集中して取り組んでいた(写真1)。子どもによっては,制作時間が短かったようで,「もっと時間が欲しい」という意見もあったが,コラージュの制作を通して多くの子どもが,満足感や達成感を味わっているのが分かる(表2)。

表2 第1時のアンケート回答例

<p>1 コラージュが完成した時どんなことを思いましたか</p> <ul style="list-style-type: none"> コラージュっておもしろいなあと思いました。 やっと完成した。うれしい。 いいのができたなあ。 あっ…いつの間にか私の好きな物やファンの人を貼ってる!なんだかさっきよりリラックスしたような気がする。 もっと時間がほしい <p>2 友だちから感想をもらった時はどんなことを思いましたか</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分ではおもしろいと思わなかったけど,みんなはおもしろいと言ってくれた。 こんなことも時々あったらいいなと思った。 うれしくて自信がついた 私はそんなこと思っていなかったけど,感想をもらってそうか…と思った。 いいプレゼントだねと言われたときは,とてもいい言葉だなと思った。



写真1 第1時授業風景

S D法によるアンケートでは、10項目中9項目において点数の上昇が見られた(図2)。点数の上昇が大きいものは「自信が付いた 自信がなくなった」(3.3点 4.2点),「楽しい 楽しくない」(4.1点 4.9点),それに「満足な 不満足な」(3.8点 4.6点)などである。子どもたちはコラージュを制作することによって、満足感を得ることができ、楽しんで活動できたことがうかがえる。この結果より検証 及び について,そのねらいを達成することができたと言える。

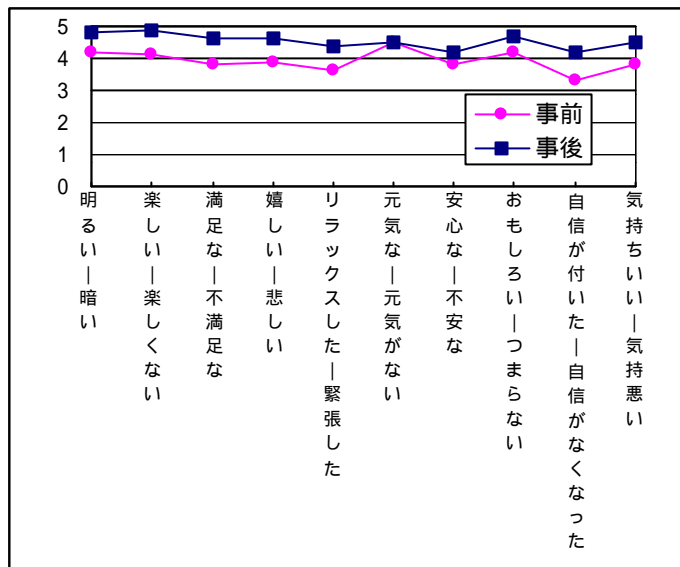


図2 コラージュ前後の児童の心情の変化(第1時)

(2) 検証授業2 (2 / 5)

ア 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き 掛 け	検 証
1 本時の学習を知る	・ 4人グループでコラージュを共同制作することを伝え,グループで制作中の簡単な決め事をさせる。	検証 検証 検証 及び
2 コラージュを制作する	・ グループで話し合いをしながら制作を進めていくよう声掛けをする。	
3 他のグループの作品を鑑賞し,グループ内で感想をまとめる	・ 一人一人に意見を出させ,グループとしてまとめるようにさせる。	
4 アンケートと感想を記入する	・ 制作中やシェアリング場面のことについて自由に書かせる。	
5 本時のまとめをする	・ 感想などを発表させる。	

イ 第2時(グループで制作するコラージュ)における考察

グループで制作することを伝えたとき,「やったー」という声と「えーっ」という声が聞かれた。前回のコラージュが楽しかったので,次の計画を自分なりに考えていた子もいたようだ。しかし,コラージュを終えたときには,グループで制作する楽しさやおもしろさを多くの子どもが感想に残している(表3)。写真2は,グループで制作している子どもたちの様子である。

表3 第2時のアンケート回答例

1 グループで制作中,何か友だちのよいところに気付いたことがあったら書いてください
・ ぼくの貼る所がなくなって来たけど, 君が「ここはっていいよ」とってくれたのでよかった。
・ 君は動物が好きなんだということに気付いた。
・ 私が題をこれにしようと思ったら,みんな「いいねー」とほめてくれた。
2 できあがったときの気持ちを書いてください
・ あーなんか楽しかった!! 1人よりみんなでやった方が楽しかった。
・ とてもおもしろくて,自分たち独特の趣味(感情)があった。
・ みんなでやると,ほかのものも見れるのでいいです。
3 今回のコラージュを通して全体的な感想を書いてください。
・ 1人じゃなくて3人でやったから,にぎやかでいろんなものをコラージュにできた。
・ コラージュは2回目だけど予想以上にきれいにできたし,みんなでやると楽しかった。
・ とても楽しかった。一人一人がぜんぜんちがうのを貼っていったのにいいのができた。



写真2 第2時授業風景

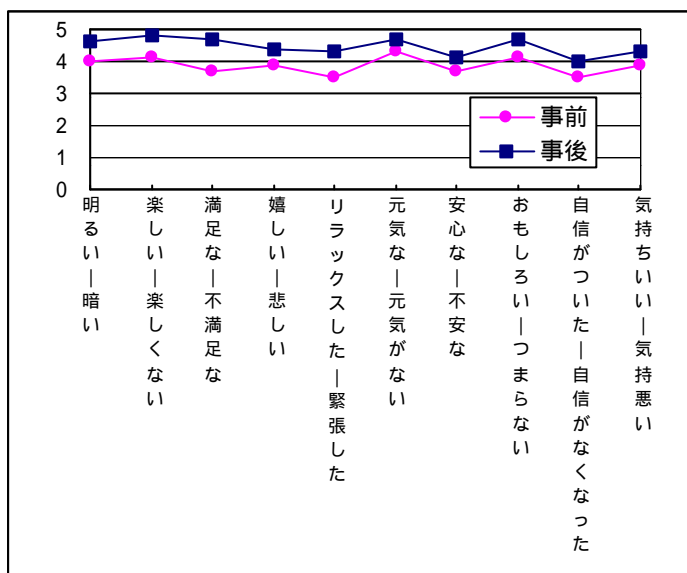


図3 コラージュ前後の児童の心情の変化(第2時)

10項目中のすべてにおいて点数の上昇が見られる。子どもたちが達成感・満足感を実感できていると言える。特に今回は、満足感を問う項目の伸びが大きい(図3)。

グループで行ったコラージュを通して、多くの子どもが友達と一緒に制作することに喜びを感じている。グループで制作する場合、イメージを互いに共有することができるので、子どもたちは自分の世界に相手が入ってきてくれたことへの喜びや、相手の世界をのぞくことのおもしろさを感じ取っているようである。そのことは、「自分たち独特の趣味があった」という言葉にも表れている。

(3) 検証授業5 (5 / 5)

第3時に個人での制作、第4時にグループでの制作を繰り返し、第5時にはクラス全員で制作を行った。授業の流れとしては、グループでの制作とほぼ同じである。異なる点は、第2時では活動3でコラージュを制作したグループ内で他のグループの作品を鑑賞し、感想を書かせたが、今回は、出来上がった1つの作品をみんなで鑑賞し、感想を出し合ったことである。今回のコラージュは、人数が多いのでまとまりが付くのであろうかと不安な面もあったが、子どもたちは自分が満足することはもちろん、他者への気遣いもしながら進めることができたので、みんなが満足する作品ができたと思う(写真3)。他者への気遣いといっても重ね貼りをするときの確認と、それに対する答え方だけなのであるが、そのような体験はこれまではあまりなかったように思う。出来上がった作品の感想として「一人一人の個性が詰まっている」「みんなで協力してすてきな作品ができた」など、多くの子どもが、互いを認め合う感想を残している。他者理解が深まった結果だと言える。

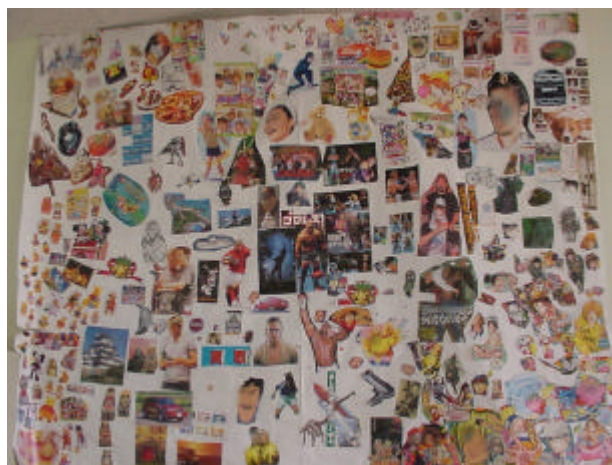


写真3 クラス全員で制作した作品

(4) 全体を通しての考察

ア アンケートの分析結果より

子どもたちは、コラージュを実施する前に行ったアンケートでは5回の授業とも、緊張や自信のなさ、不安を抱く傾向が強かった。しかし、自己存在感の妨げとなっていたであろう緊張感、不安感、自信のなさというものが、コラージュをすることによって抑えられ、自己存在感が増していったということが、コラージュ体験後の点数の上昇から言える。これらの満足感や達成感は、個人でコラージュを制作したときに生じるのはもちろんのこと、グループで共同制作することにより、子どもたち一人一人の思いが合わさって生まれたとも言える。子どもたちは、作品を共同で制作する際に互いのイメージを共有し合ったり、逆にイメージを侵害し合ったりする。これらのイメージのせめぎ合いは、最終的にみんなが満足する作品が完成することにより、より深い他者理解へとつながっていったと考える。

さらに、シェアリングを通して他者理解が進むような場面を用意したことによって、子どもたちは自分を肯定的に振り返るとともに、他者に対する共感的な態度を身に付けていくことになったと思われる。

イ Q - U (学校生活意欲得点 , 学級満足度尺度) の変容より

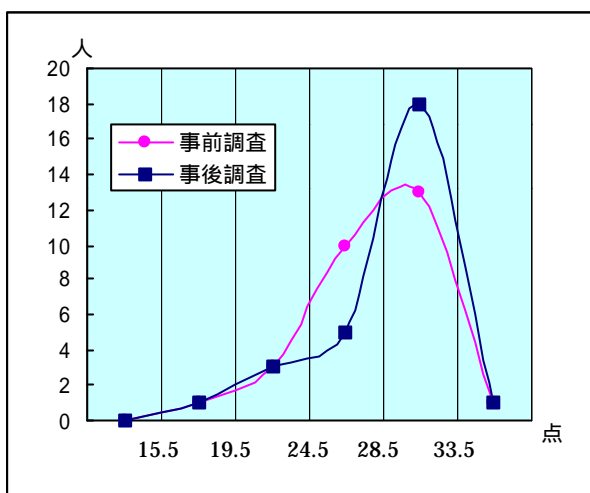


図4 学校生活意欲得点の変化

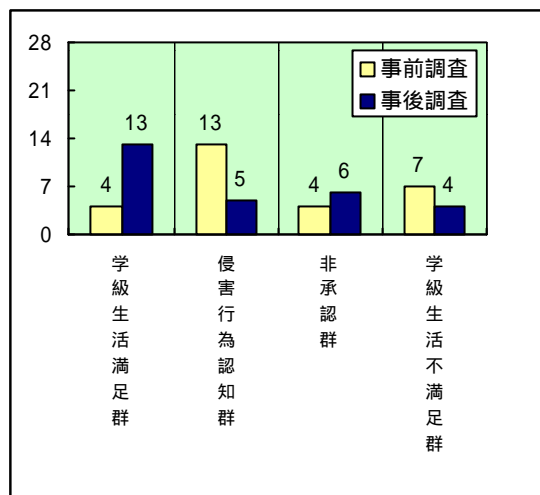


図5 学級満足度尺度の変化

図4は友達関係，学習意欲，学級の雰囲気3項目の合計得点の分布である。得点が高いほど学校生活に対する意欲が高いことになる。図5は児童の学級生活での満足感，充実感を4タイプで示す，学級満足度尺度である。学級生活満足群の人数が多く，その他の群の人数が少ないほど，理想的な学級状態と言える。

図4では，個々の児童の学校生活に対する意欲の高まりを見ることができる。また，図5より，コラージュ体験前に「侵害行為認知優位」(意欲は高いがトラブルが発生しやすいタイプ)であった学級が，体験後に「学級生活満足優位」の学級へと変化していることが分かる。これらは，自分の内面をコラージュ制作により思う存分に表出したことで，自己存在感が高まったこと，グループ制作やシェアリングを行うことにより得られた他者への共感的なかわりによって，他者理解が進んだことを示すものであると考える。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

自分に対する自信や，他者への思いやりは，集団の中で育っていくものである。相手を意識する中で芽生えるものだからである。しかしながら，集団の中で育てると同時に，自分の中だけで解決しなくてはならない問題もある。今回のコラージュは自分の内面を思い通りに表出し自分を見つめ直すきっかけになるとともに，子どもたちは自分の内面を表出することを通して他者とかかわることができた。これらの体験を通して，子どもたちは今ある自分に対する自信を深め，同時に他者に対する共感というものを感じ取ることができたと思う。このことは，本研究の主題に掲げていた子どもたちの人間関係能力の基盤となる自己存在感と，他者への共感的態度の育成につながったと考える。

(2) 今後の課題

今回は，自己存在感と他者への共感を高めるための手立てとして学級で行うコラージュに取り組んだ。しかし，子どもたちの人間関係というのは，他の学級や他の学年にも広げて考えなくてはならない。そこで，考えなくてはならないのが，子どもたちの自己存在感や，他者への共感というものを高めるための学校全体としての取組である。今後，学校全体を対象にした取組ということについても考えていきたい。

《引用文献》

- (1) 諸富 祥彦 『学校現場で使えるカウンセリングテクニック上』 1999年 誠信書房 p.153
- (2) 國分 康孝総監修 『たのしい学校生活を送るためのアンケートQ - U』 平成11年 図書文化社

《参考文献》

- ・ 杉浦 京子 『臨床心理学講義』 2002年 朱鷺書房